

観光群島バレアレスの光と影
——巨大観光群島バレアレスの過去，現在，並びに将来の問題点——

田 辺 英 蔵

Problems to tourism in Balearic Islands.

*

"In Palma everybody is happy"

Jean Cocteau

*

"There are more tourist beds in the bay of Palma de Mallorca than there are in the whole of the Eastern Mediterranean, from Greece round to Algiers, and the number is still growing. Palma is the granddaddy of mass tourism, and its children continue to produce grandchildren on the coasts of all four islands"

Andrew Eames, project editor "Mallorca d Ibizd, Menorca d Formentra" 1987.

Eizo Tanabe

The coast of the Mediterranean, which was formerly the preferred winter vacation grounds of Europe's upper classes, has become in recent years a popular summer vacation destination for all Europeans. Of course, Majorca, the main island of the Balearic Archipelago, is no exception. Following the Second World War, it was widely publicized as a tourist destination for the masses. Recently, however, Majorca framed plans to upgrade its image from "popular" to "upscale" and is carrying out policies to regulate smallscale tourism development and expand its airport.

The island of Majorca has benefited from the almond and olive orchards that have always formed the basis of its beauty. However, their future is in doubt due to instability in the prices of primary produce and questions as to whether orchard owners will continue to follow in the footsteps of their ancestors.

Throughout the world, tourist destinations tend to face common problems, including a decline in image as their popularity increases and a decline in scenic beauty as their surrounding agricultural base deteriorates.

I discuss the above topics based on information gathered during two-month-long field studies in each years from 1990 to 1994 at the height of the summer vacation season in Majorca. These topics form the main theme of this paper.

Eizo Tanabe

目次

はじめに

第1章 過去の栄光

第1節 バレアレス概観

第2節 来訪者達

第2章 現状

第1節 乱開発

第2節 大衆化

第3節 典型的な大衆観光地アレナールの実状

第4節 冷房マジョルカと冷房無しのマジョルカ

第5節 パルマ空港の発着頻度について

第3章 将来展望

第1節 スペインの自治州について

第2節 パルマ空港拡張の意味するもの

第3節 悪貨は良貨を駆逐しないか

第4節 農業と自然景観

はじめに

ジョルジュ・サンド、ショパン・サルバドール大公の昔から、その明眉な風光と温暖な気候によって多くの観光客を集め、“ヨーロッパの夏の首都”の名を恣にしたマジョルカ島を含むバレアレス群島は、戦后滔々たる大衆化の波に洗われ、客単価の低下、乱開発による自然破壊、そして農地並びに農業者の将来展望の不透明という三重苦に喘いでいる。1989年から1994年に至る5年間の夏の2ヵ月、観光の最盛期を現地に過ごした筆者の観察と体験によって観光地バレアレスの現状と問題点を検討したのが本報告である。

第1章 過去の栄光

第1節 バレアレス概観

「Insight guides, Mallorca & Ibiza」(APA publications)の執筆者 Andrew Eames はバレアレス群島について次のように書いている(抄訳)。

“バレアレス一家は3人の兄弟と1人の妹

とから成立っている。総領のマジョルカ(Mallorca, マヨルカとも発音。人口53万)は最も大きく(3640km²)、声も財力も一番大きい。マジョルカは一つの小型の大陸である。無数の浜があり、山脈があり、鉄道があり、耕やされた平野、歴史的大都市(パルマ)、デパート、ブチク……があり、ミシュランの星印を持つレストラン(複数)では王侯貴族が食事をする。

次兄のメノルカ(Menorca, 人口5万6千, 701km²)は大声で自己を主張する長兄と若くて当世風な末弟のイビサの間であって至って静かな性格なので、彼を理解するためには彼を会話に引込む必要がある。一見単調に見える風物を楽しむためには鋭くやさしい眼を必要とするが故にこの島は静かで成熟した客にふさわしい。この島はシウダデーラ、マホン(Ciudadella, Mao 又は Mahón)という二つの驚くべき町と古代史の倉庫と呼ぶに足る先史時代の遺跡を持つ。

若くて当世風なイビサ(Ibiza, 人口5万, 541km²)は数世紀の雌伏の後に近年時代の脚光の中に躍り出た。今やこの島は“raver, clubber, and music lover”の夏のメッカである、岬々とした岩山の自然は放置され、農耕者は観光業に専心している。ロック、ポップのスター達は当地で夏の休暇をとり、多数のホテルは宣伝を必要としない。(引用者注。上記は1989年の記述である。1992年の夏——ヨーロッパの景気は沈滞——に筆者が訪れた際には世界最大と稱されたディスコは休業し熱気は沈静かに見えた)。

たった一人の妹フォルメンテーラ(Formentera, 77km², 人口4千)は4キロの水道でイビサと距てられ、未だ成年に達せず、すなわち自立出来ず、お兄さんのイビサ(に集る観光客)に頼って生きている。この島の住人はスペインで一番の長寿である(引用者附記。上記は陸上から見た意見であり、海上から観察すればフォルメンテーラの入江と浜はヨット



図1 地中海鳥瞰図、左側の横並び3島がバレアレス群島、左よりイビサ、マジョルカ、メノルカ
(原図 LIFE, VOL. 22, NO. 2)

トとヌーディストの夏のメッカである)”。

第2節 来訪者達

マジョルカ島の来訪者について前出「Mallorca & Ibiza」の編著者の一人 Ben Roth は次のように書いている。

“バレアレスの夏は春から秋まで続く(引用者注。普通6—9月の4ヵ月が夏のバカンスと社交のシーズンと考えられる)。この期間著名人の到着又は離島を報ずる新聞記事を欠く週は珍しい。著名人 (significant) とは、アラブ (arabs, すなわち複数。以下同様)、芸術家、^{アリストクラツ}貴族、映画俳優、歌手、遺産相続による社交界の常連と、彼らと結婚した美人達 (society figures who have inherited it, and beauties who have married it)。すなわち、マジョルカを訪れる jetsetters は世界の何処とも変わりはない。但し、この小さな島では彼らは注目され、島人達は彼らを誇りに思う。彼らの^{こゝし}嚆矢はショパンとジョルジュ・サンド (1838年冬期に滞在) であった

が、彼らは島人達とうまくゆかずひと冬で去った。一方、1869年に豪華ヨット《Nixe》で島を訪れたオーストリーのサルバドル公 (Archduke Salvador of Austria) はこの島を愛し島民からも愛され、島の娘と結婚し、豪邸を営んで22年間島に住んだ。

最も著名な来島者はヨーロッパで最も愛されている二つの王族、英国とスペインの王家の一族である。スペイン王ホアン・カルロス、王妃ソフィアと三人の子供達はこの地の王宮で八月を過し、王室ヨットで近海を巡航し、王女エレナは乗馬、王子フィリペはヨットのレースに出場する。

1980年代にはチャールズ王子とダイアナ妃もスペイン王室の客としてしばしばこの島を訪れた。1988年にはエリザベス女王自ら夫君エジンバラ公と共に王室ヨット《ブリタニア》でこの島を訪れた (1994年10月には日本国天皇后両陛下もスペイン王夫妻と共にマジョルカ島バルマ近郊のアルムダイナ離宮に滞在)。

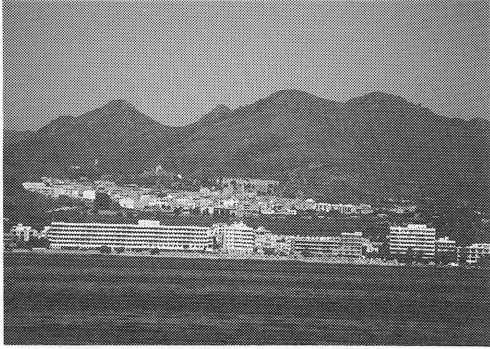


写真1 バレアレス沿岸のホテル群

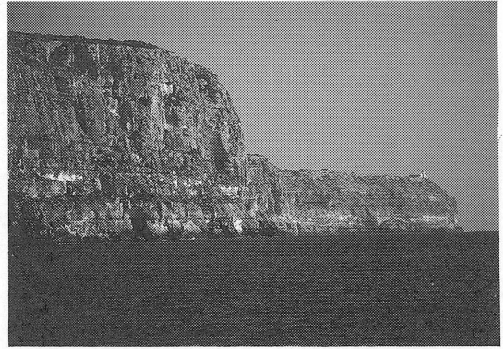


写真3 マジョルカ島西岸の大絶壁

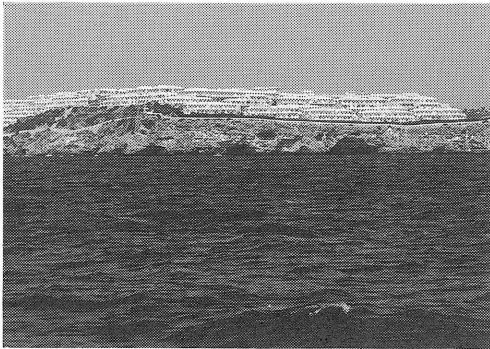


写真2 マジョルカ島東岸のコンドミニアム

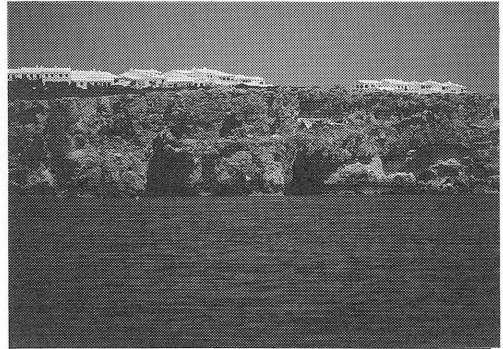


写真4 断崖上の別荘群

パルマの海岸通りにある地中海ホテルの客名簿には、エバ・ガードナー、リチャード・ニクソン、イラン国王 (the shah of Iron), エロール・フリッ、アガサ・クリスチイの名が見える。1961年にソン・ビダホテル (Hotel Son・Vida) が開業した時の主賓はモナコのレイニエ大公とグレース (・ケリー) 王妃であった。このホテルは全スペインに6軒しかない Gran Lujo (5つ星の上) にランクされている。マジョルカの北東の端フォルメントール岬に近いホテル・フォルメントール (1929年創業) の名簿にはウィンストン・チャーチル、ダグラス・フェアバンクス、チャーリー・チャップリン、クリストファー・プルマー (Christopher Pulmmer), プリンス・オブ・ウェールズ, モナコ王並びに王妃の名が記されている (津田正夫「わたしのスペイン案内」によればジャクリーン・ケネディとオナシスが親しくなっ

たのもこのホテルに於いてである。引用者)。

一方イビサの来訪者は当世風で、「Ibiza 1992」なる映画のパーティ場面には幾人かの王女^{プリンセス}の他にローマン・ポランスキイ、マドンナ、ハリソン・フォードが現れる。この島の幾つかの個性的なホテルは電話番号を公表しない。

多くの著名人が訪問地としてではなく居住地としてバレアレス群島を選んでいる。

オースタリーの前首相 Bruno Kreisky はマジョルカに住み、ヨハンナ・ハーストはこの地の邸宅でしばしばパーティを開き、エジプトのファウド王もエチオピアのハイレ・シエラス王もロシアのウラジミル大公もこの地の気候とヨーロッパの中心にある好立地を愛し、エマソンはこの地で死に、バーヂン航空のリチャード・ブランソンはメノルカに別荘を構えている。”

主要空港における到着者数(1985年)

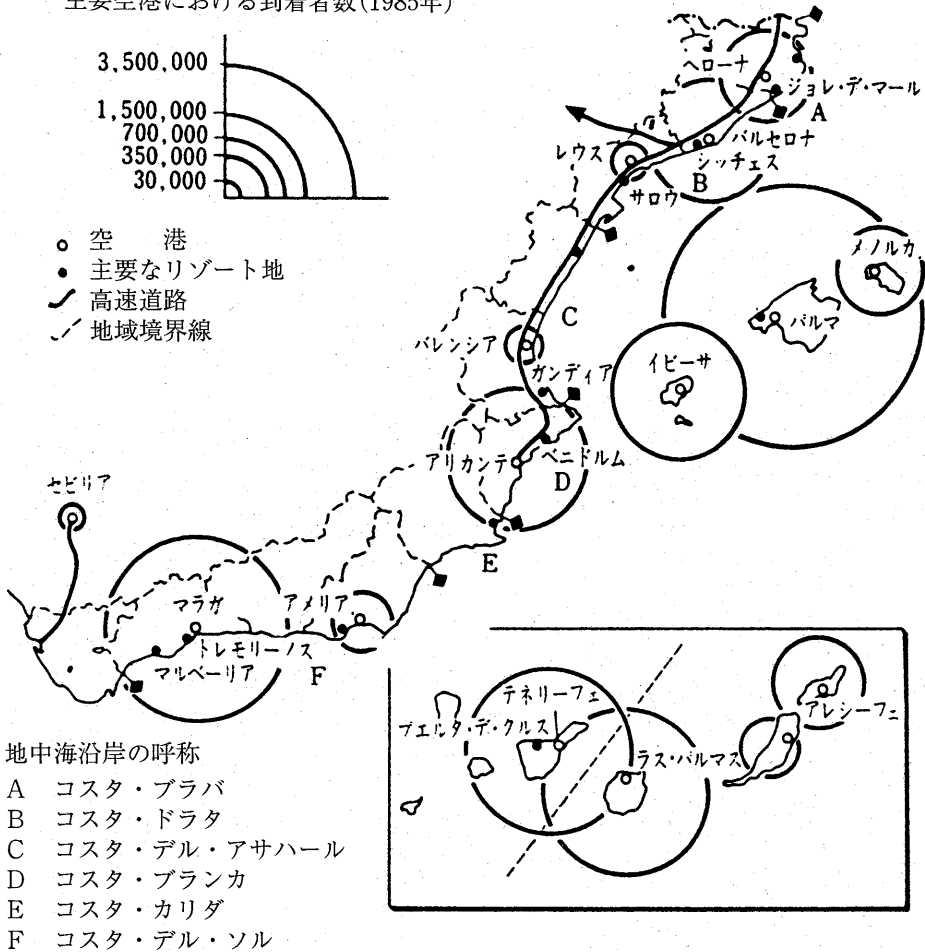


図2 スペインの主要観光地の概況

(出典「観光と経済開発」A. M. ウイリアムス, G. ショー, 1988 広岡治哉監訳, 成山堂書店1992)

第2章 現状

マジョルカ島の観光開発に関して次の三つの問題点が指摘される。

- 1) 乱開発
- 2) 大衆化
- 3) 農業の行方

第1節 乱開発

マジョルカ島の観光開発の凄まじさは同島

の周辺をヨットで巡航しつつ海から眺めれば多くの説明は不要である(写真1, 2)。

かつて—すでに1960年代から—スペインの観光開発の凄じさを評して欧州のジャーナリズムは、

「フランス・スペイン国境からジブラルタルまでホテルとコンドミニアムの壁が出来て人々は海への出口を失う」

と揶揄した(図2)。年間に国の全人口(38,636,800人—1983)を大巾に上回る観光客

表1 西ヨーロッパにおける国際観光と国民経済, 1986年

国名	観光受取額の割合 (%)		商品サービス輸入額に対する観光支出の割合 (%)
	対国民総生産	対商品・サービス輸出額	
オーストリア	7.4	18.1	10.5
ベルギー・ルクセンブルグ	2.0	2.2	3.0
デンマーク	2.1	5.9	6.3
フィンランド	0.9	3.0	5.2
フランス	1.3	5.2	3.6
西ドイツ	0.7	2.1	7.4
ギリシャ	4.6	23.2	4.1
アイルランド	2.7	4.5	4.1
イタリア	1.6	7.7	2.3
オランダ	1.3	2.2	5.1
ノルウェー	1.5	3.7	8.1
ポルトガル	5.4	15.6	2.9
スペイン	5.2	25.9	3.5
スウェーデン	1.2	3.3	6.2
スイス	4.0	8.3	7.3
イギリス	1.5	3.8	4.2

出所: OECD (1988, p, 84) 出典「観光と経済開発」

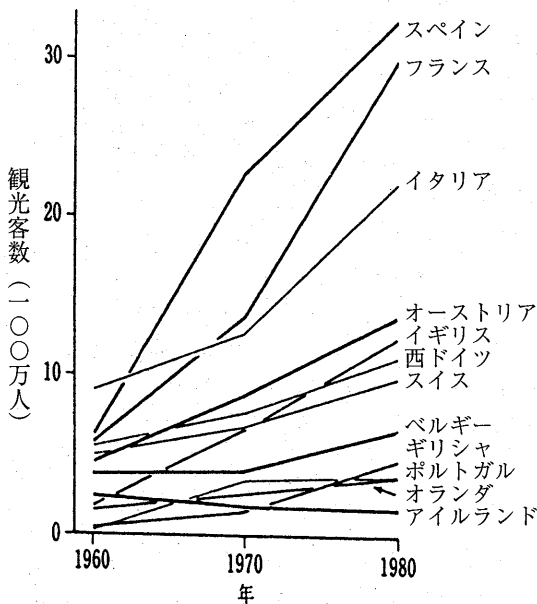


図3 国別にみた西ヨーロッパの外国人観光客数, 1960~80年

出所: OECD reports 「観光と経済開発」

(47,388,793—1986)を迎え、観光収入がGNPの1割を越す(1993)この国にあっては、観光乱開発には背に腹は変えられぬ事情があった(表1, 図3)。

マジョルカ島の沿岸の多くの部分は、幸いなことに、十数メートル、時に百メートルを越すライム・ストーン^{カラ}の断崖絶壁であって(写真3)、その間に大小の入江と砂浜とが点綴している。

何故「幸いなことに」かと云えば、一般に断崖絶壁の部分は大規模観光開発の対象にならない。重ねて、何故「一般に」と限定するかといえ、往々にして断崖絶壁の上に別荘が立ち並ぶ光景を眺めるからである(写真4)。一方、砂浜のあるところと、その周辺はホテル・コンドミニアムの壁が形成される。マジョルカはその地質学的性格によって、再び幸か不幸か、海岸線の長さ^{パベア}に比して砂浜が少い。すなわち自然保護の観点からは「幸」であり、観光開発の観点からは「不幸」である。広大な湾の沖を航過する時、船上の人間はアッと驚きの声をあげて陸岸を凝視する。黄土色のライムストーン^{パベア}の崖に浅緑の地中海

松が覆いかぶさる風光が突如として白い建物群にとって代る。およそ世界中のあらゆる観光地に見られる(見倦きた)四角い巨大ビル——ホテル、コンドミニウム——の壁である。ガウディを生みピカソ、ミロを育てたこの民族が何故にこのような平凡で変哲も無い建物を建て、それによって明眉の風光を毀つのかと訝かられる。

このような巨大開発の前提は砂浜の存在である。砂浜のあるところにホテル、コンドの巨大建築群が蝟集する。何故ならば観光客は砂浜を好むから。

第2節 大衆化

ヨーロッパにあっては休暇は最低一週間であり、マジョルカを含むバレアレス群島はヨーロッパの首要都市から空路僅々1～3時間の距離にあり、后述する如く、パルマ空港には全ヨーロッパからの団体向けチャーター便が昼夜を分たずに発着している。すなわち第1章の記述とは裏腹に、現在のマジョルカの観光を支えているのはまぎれもないヨーロッパの大衆であり、大衆は砂浜を好み砂浜に蝟集する。

大衆はソフィスティケイテッドな、つまりは小難しいレジャーに興味を持たない。彼らはゴルフやテニスや乗馬はしない。したとしてもその数は高が知れている。殆んどの大衆は巨大ホテルに団体料金で宿り、或は町のペンションに家族、親族、友人の団体低料金で泊り、終日浜で甲羅を干し、水浴をし、水上バイシクル(足漕ぎ、2人乗り)やバナナボート、グラスボトムの観光船、パラセーリング等々の他愛無い遊びに若干の金を使い、夜は砂浜の向背地のホテル街の盛り場をぶらつき、土産物屋、安いブチクをつつき、バーでビールの満を引いて数日を過ごし帰って行く。その主たる舞台が砂浜である。例外としてマジョルカ島南東岸のカラ・フィギュエラカラの如く、崖と入江のみで浜を持たぬ観光地も

あるが、それはこの入江の奥の漁村の風光が喧伝された結果であって、一般には巨大数の客を吸収容するためには巨大なふところが不可欠であり、そのふところは砂浜である。戦後の殆んど無制限の——と云わんより大いに奨励助成された——観光開発に依り、マジョルカ島の開発可能な部分すなわち存在するすべての砂浜の周辺は開発し盡され、不粋な四角い建物群に覆い盡くされた。すなわちマジョルカ島の乱開発はバカンスの大衆化の当然の帰結であった。一般に富裕階級は①少

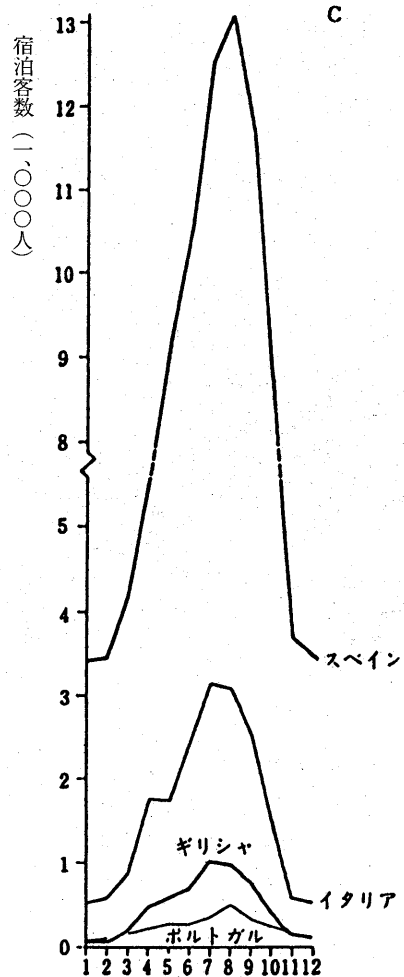


図4 南西ヨーロッパ観光産業の季節性、1983年
出所：OECD (1985) 出典：「観光と経済開発」

数であり②広い敷地に緑を保存し③周囲から目立たぬように家を建て④その家は概して趣味が好い。

暑い夏

奇妙な話ではあるが、地中海の夏は必ずしもバカンスに適さない。何故ならば暑すぎる。前節で繰返した如く、昔は地中海は避寒地であった。「暑いこと」「人間が快適に裸でいられること」「そのような天気安定して続くこと」はアダム、イヴ以来の楽園すなわちリゾートの条件ではあるが、地中海の夏は如何にも暑過ぎる。かつての上流階級はバカンスの時期を自由に選べたから、彼らは冬にやって来た。今でも地中海にヨットを置く中産階級以上の人間の中には、

「夏は暑いから」

とヨットを北欧へ移動させる例が散見され

る。もとより気候が快適なのは池中海沿岸とて夏ではなく春、秋であるが、冬といえども北欧に比べれば極めて温暖である。既述の通り、マジョルカは欧州の主要都市から2—3時間の距離にあるから中産階級以上（例えばヨットのオーナー）は地中海にヨットを置き、季節を問はず短い休暇の度に来島してバカンスを楽しみ得るが、大衆並びに学生、若者はその自由を持たない。故に彼らの長期休暇は夏に集中する（図4）。

第3節 典型的な大衆観光地アレナールの実状

バレアレス群島の首都は主島マジョルカに在り、パルマの東南東10キロに観光地アレナールがある（図5）。

アレナール (arenal) とはスペイン語で砂地のことである。その名の通り、アレナール

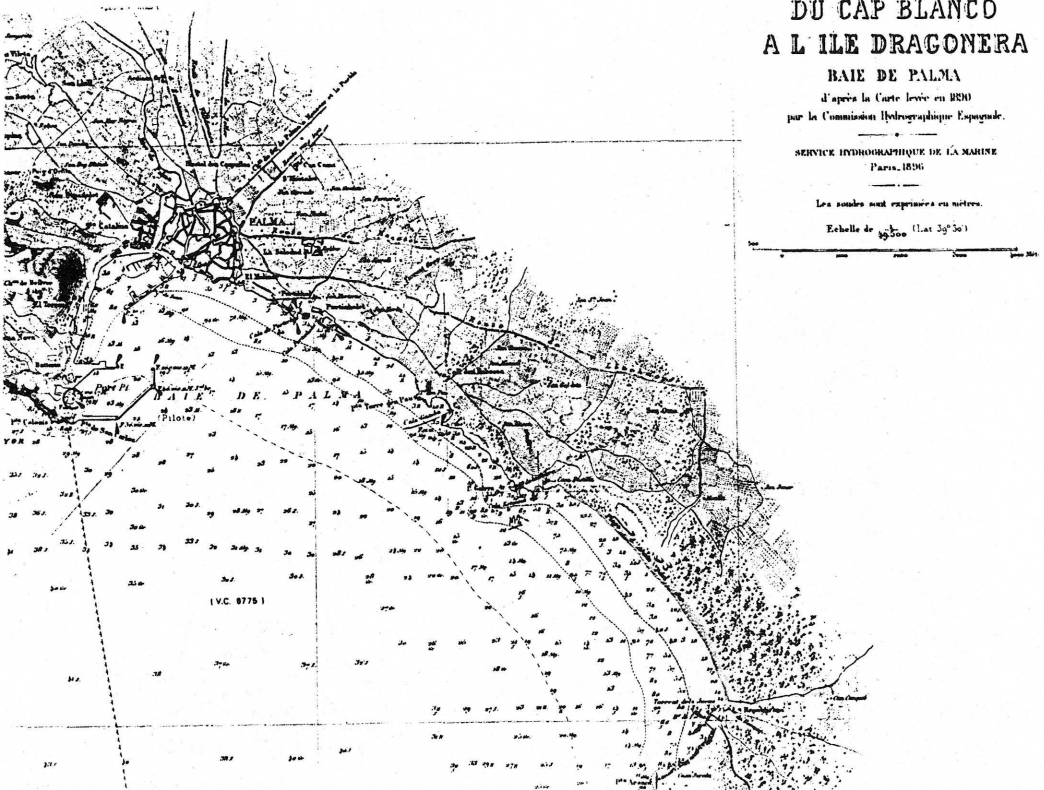


図5 往時の ARENAR を示す古地図（右下端の一帯。左上端がパルマ）

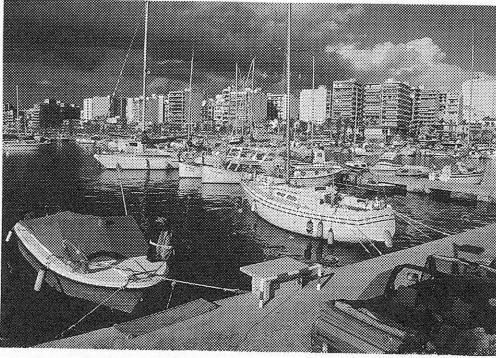


写真5 アレナールのホテル群

はマジョルカ島で一、二を争う長大な砂浜を持つ一大大衆観光地であり“巨大なる熱海”と考えられる。熱海と違う点はその規模と砂浜の広大さ、長大さである。熱海の地型は背後に山を負った入江で、南仏モノコを彷彿させ、試みに両者の同縮尺の地図を重ねると略同規模である。アレナールは、その名の通り、かつては広大な砂地と松林であったと思われる(図5参照)。広大なパルマ湾に面した平闊な地型に恵まれ、岩礁、港湾に中断されつつ東西10キロになんなんとする砂浜の背後に道路を距ててホテル、コンドミニアムの壁が出来ている(写真5)。建物の一階はレストラン、バー、両替屋^{カネビョウ}、銀行、ブチク、土産物屋、小型スーパー等々が軒を連なる。浜の奥行きは深く砂は白く、ところどころに木の小枝を細く縫んだ野趣豊かなパラソル(自治体製の公共施設)が林立して濃い陰を作り、地平迄続くかと思われる浜を半裸の滞在客が埋めている。規模の点では熱海はアレナールの敵ではない。

一方熱海とアレナールの類似性、共通性は両者の大衆性である。大衆指向ではない。両者共出来れば大衆観光地から脱却したいのだが押し寄せる大衆化の波に抗し得ず今日に至っている。熱海はかつてはまぎれもなく上流保養地であったが、アレナールは高級観光地が大衆化したのではない。アレナールには

昔から何らの観光資源——古蹟、風光、文化資産——を持たない。あるのは砂浜と烈日と青い海だけである。大衆はそれで満足する。そのかわり大衆観光地には“ふところ”の広さが必要である。旅行案内社が、これでもか、これでもかとバック客を送り込んでアレナールの砂浜^{ふところ}が吸収してしまう。加えてホテル、コンドを建てる余地はいくらでもあったから業者は躊躇無く建て続け、アレナールの東の端のヨットハーバーから西の端のパルマまで、ホテル、コンドの壁ができてしまった。アレナールはその壁の東の一部に過ぎないが、アレナールは一つの象徴であって、アレナールに起こったこと起こりつつあることがマジョルカの観光の縮図、問題点であり、後述するバレアレス州観光局の頭痛の種である。客が来さえすれば店は自然に発生する。その店のレベルは客が決める。アレナールは大衆観光地だから店はすべて大衆向きである。見事に大衆向きで熱海の銀座通り^{ほうみつ}を彷彿とさせる。

第4節 冷房マジョルカと冷房無しのマジョルカ

マジョルカ島には幾つかの——幾つもの、と云うべきか——観光地域があり夫々に特徴を持つが、量質共に主体は首都パルマ周辺であり、尚且つ、この島にやや詳しい来島者は、パルマの東と西の間に微妙な差のある事に気付く、この差を“冷房のマジョルカ”と“冷房無しのマジョルカ”と呼んで区別する。パルマの北の丘陵地とパルマ以西の海岸線一帯が“冷房の有るマジョルカ”であり東のアレナールは“冷房の無いマジョルカ”である。^(注) 一般に“冷房”地区ではホテルもレストランもタクシーもヨットも冷房しているのに反し、“非冷房”地区ではそうではない。

注：スペイン語で con は「有る」英語の with、sin は「無い」英語の without

アレナールに何軒のレストランテ、カフェ、バーがあるかつまびらかでないが、筆者が住んでいるヨットの泊地 CNA (Club Nautico Arnal アレナール・ヨットクラブ) のクラブハウス (冷房無し) から歩いて行ける程度の距離内に冷房をしている店は中華料理店が一軒あるきりである。ホテルにも空調なしが珍らしくない。之に反し、バルマ地区では空調しているタクシーに当ることがあり、ホテル、レストランテから呼ぶタクシーは普通冷房付だがアレナールで客待ちしているタクシーは当然として、クラブハウスから電話で呼んだタクシーでも冷房はまず無い。

地中海沿岸の大衆、並びに住民は冷房の有無をあまり気にしない。アジアモンsoon地帯に位置する日本及至東、東南アジアに比べて地中海沿岸は乾燥しているから、熱暑を厚い石壁の室内に避けることが出来、尚且、日中の炎暑にも拘らず落日は清涼の夜気を楽しめるからである。だがそれは一般大衆の話であって、富裕階級、上流階級、中産階級以上を対象とした店はホテルでもレストランテでもブチクでも冷房している。

これは「コールドチェーンの法則」に基く。

上記各階級は普通自宅も空調していて自家用車も空調付でありオフィスも空調している。このような「コールドチェーン」の中に生活している人物はそれなりの服装すなわち背広にネクタイを着用しているからホテルのロビーやレストランテ、たまたまのぞいたブチクが冷房していなければうだってしまう。

すなわち“冷房”地区はアッパーを対象とし、“非冷房”地区はマスを対象としている。問題は市場としてそのどちらを選ぶかであり、マジョルカ観光局は今やこの選択に直面している。

第5節 パルマ空港の発着頻度について

前記のアレナールからバルマに至るホテルとコンドミニアムの「壁」に巾広い空隙が

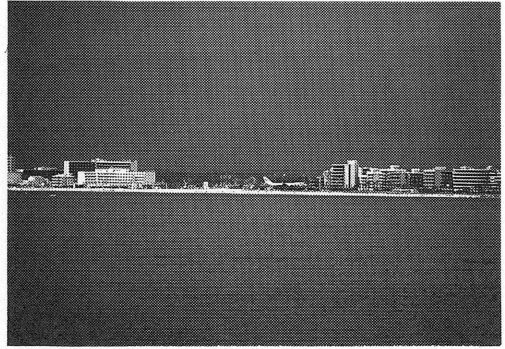


写真6 ホテルの壁の隙間に消えるジャンボ

一ヶ所ある。バルマ空港の2本の滑走路は略南北に伸びているので、その延長線はバルマ湾の海岸線と略直角に交る(図6)。空港はバルマとアレナールの丁度中間にあり、上記のホテルの壁の隙間は滑走路の延長線の部分であって、アレナールのヨットの上から眺めると、遙か沖合ペニンシユラすなわちスペイン本土の方向から進入して来る航空機はバルマ湾上で高度を下げた海面すれすれを飛び、^{くだん}件の隙間に消える。ビルとビル間にジャンボ機が消える光景は奇観と呼ぶに値する(写真6)。この光景は、観光立島に徹するマジョルカにあっては騒音公害又は之に類する公害という概念が存在しないことを示す。

CNAのヨットの上で暮すヨット乗りにとってバルマ空港の発着状況は天井桟敷から舞台を見るように観察し得る。既述の通りかつてバルマは「地中海の夏の首都」と呼ばれ、夏季バルマ空港の発着便数はパリのオリオール空港(当時)より多いと喧伝された。現在でも便数の多さは少しも変らぬらしく、夕暮時、バルマ湾の水平線には接近する空港機の前照灯が常時3つ位連って見える。発着便の間隔が5分とも2分とも云われるのは少しも誇張ではないと感じられる。尚且、この航空機の輻湊は夜を徹して続く。たまたま夜中の2時、或は4時、5時に眼が覚めて船内船外を見回る折(ヨット乗りはしばしばそのよ

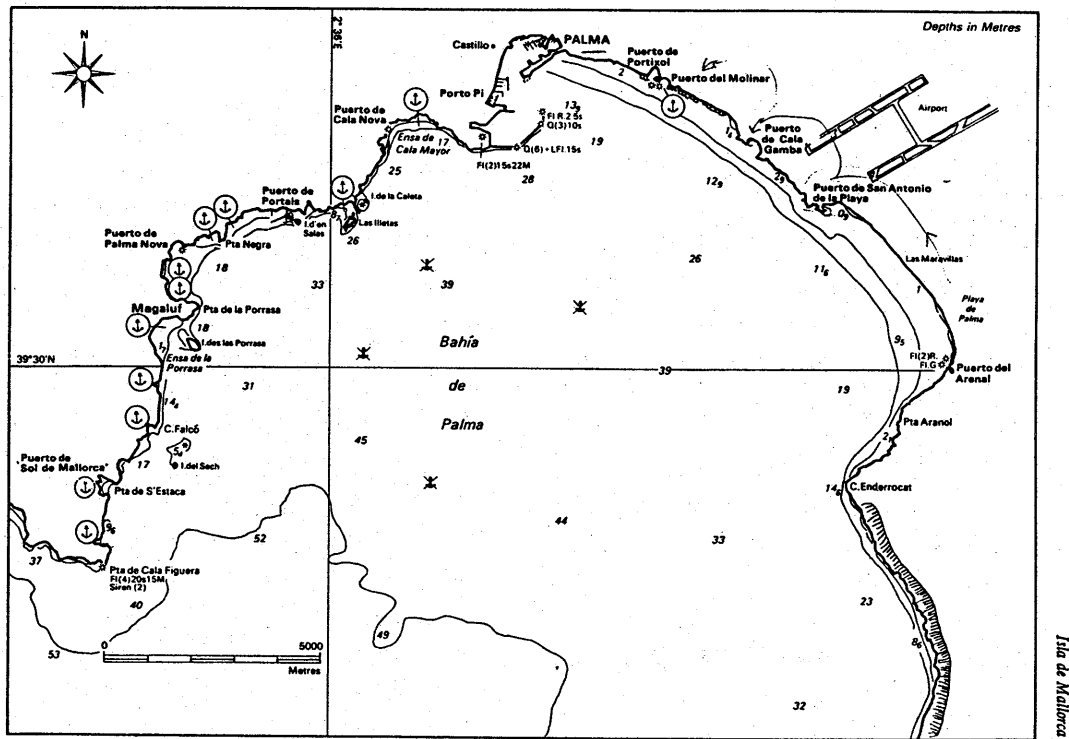


図6 パルマ湾概念図 (「East Spain Pilot」 by R. Brandon)

うな行動をする), パルマ湾上に低く飛ぶ航空機の灯火を認める。パルマ空港の定期発着便の最終便は夜半すなわち午前1時前後であるから、この光景は日本人にとっては不可解であるが、海外では定期便以外の発着があるのは別に珍しいことではない。①チャーター便②私用機というものが、パルマ空港の発着便数の70%はチャーター便だから定期便だけの統計数字は全く輸送の実状を現わさない。

夏のパルマ空港の発着ロビーの光景は壮観である。二階層吹抜けの広大なロビーには見事に日焼けした肌を露わにしたカジュアルウェアの老若男長が荷物と共に長蛇の列を作って全欧州各地又は他の島々、イビサ、メノルカはたまた本土各地への便を待っている。人々は嬌声を発し声高に話し、笑い、叫び、子供は走り、將に鼎の沸くが如き状況を

呈する。その隣の到着客の出口からは、まだ陽焼けていない老若男女が山のような荷物をカートに積み、或はバックパック一つの身軽さで期待と不安の入り交じった表情で現れ、出迎えた友人知人恋人と握手し抱き合いキスを交わすが殆んど客は団体客で会話は英語からドイツ語 (圧倒的に多い) へと代り、大小の看板を掲げ揃いのTシャツ、ユニフォームを着た団体の係員に迎えられ引牽されて戸外の烈日の中待つ大型 (冷房) 観光バスへ消える。

之を要するに、パルマ国際空港の発着は2~5分間隔24時間営業と稱せられるのもあながち誇張ではなく、年間1200万人(1993年)毎年記録を更新するバレアレスの集客能力の多くは、空港の高率利用が支えていると思われる(表1、後出の表2参照)。

この空港に今年1994年、巨大なクレーンが林立し、400億ペセタ（1994年夏現在100ペセタ80円。すなわち邦貨320億万円）をかける拡張工事が始められた。

第3章 将来展望

第1節 スペインの自治州について

1975年故フランコ総統死后スペインは民主化と地方分権化に動き、全土を17の自治州 (autonomous community) に分け、バレアレス諸島 (マジョルカ、メノルカ、イビサ、フォルメンテラ) もバレアレス州 GOVERN BALEAR となった。各州は政府と議会と徴税権を持つが、税金は一度中央政府^{マドリッド}に行き、一定の% (並びに相当の交渉) に依って各自治州に還付される。

第2節 パルマ空港拡張の意味するもの

現在のパルマ空港の滑走路は3000メートル級2本 (図6参照)、夫々の滑走路に殆んど同じ巾のタキシイング用の走路が平行して走っているの、上空からは滑走路4本に見える。この滑走路は略南北に伸び、航空機は

滑走路と直交する高速自動車道路、一般自動車道路並びに海岸向背地の林と草地、続いてホテル街、海浜のプロムナード、そして砂浜^{プラヤ}の上を低く航過する。離着陸の方向は風向きに従って交替する。

今回の拡張計画には滑走路の増設は無い。后段で詳述する通り、今マジョルカ観光当局が望んでいるのは来島客の増加ではない。量より質 (客の) の向上である。予算総額400億ペセタは関西空港のそれ (1兆5千億円) に比すれば僅少に感じられるが、一つの空港のプロジェクトの予算としてはスペイン最高であり、一自治州としては思い切った投資と思われる。この投資は来島客数を増やす為と云わんよりは乗降客の利便と空港のレベルアップを目的とする。計画の中心には屋上に数面のテニスコートと巨大な屋内プールを持つ大ホテルが据えられ、パーキング、ターミナルビルは大拡張され (300m×150m) (写真7)、204のチェックインデスクのうちの12デスクは自転車、カヌー、サーフボード用となる。注目すべきは (羨望すべきと云うべきか) 用地問題並びに騒音すなわち地域住民間

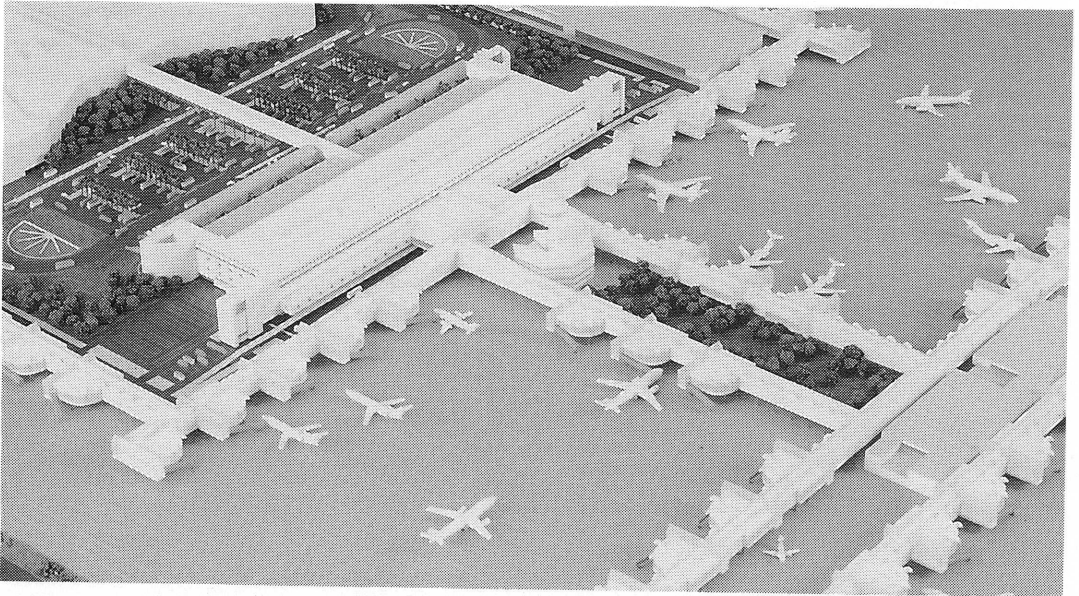


写真7 パルマ空港拡張工事完成模型 (この他、左端に大ホテルが建つ)

表2 パルマ空港便数・旅客数(1993)並びに過去32年(1961—1993)の推移

CLASE DE TRAFICO	ENTRADAS		SALIDAS		TOTALES	
	Aviones	Pasajeros	Aviones	Pasajeros	Aviones	Pasajeros
Tráfico Nacional	17.852	1.679.762	17.753	1.712.998	35.605	3.392.760
Tráfico Internacional	28.448	4.506.811	28.536	4.529.721	56.984	9.036.532
Avionetas y otras clases de tráfico	1.951	3.771	2.035	3.536	3.986	7.307
TOTALES	48.251	6.190.344	48.324	6.246.255	96.575	12.436.599

年次推移

Años	Vuelos	Pasajeros
1961	20.314	819.469
1962	25.180	1.044.633
1963	28.768	1.226.811
1964	34.395	1.636.821
1965	40.224	2.046.196
1966	41.773	2.393.340
1967	45.757	2.734.534
1968	48.567	3.168.178
1969	61.027	4.078.968
1970	68.339	4.723.331
1971	77.062	6.166.447
1972	80.249	6.946.491
1973	81.206	7.096.715
1974	72.679	6.442.185
1975	74.485	6.812.370
1976	70.468	6.367.294
1977	76.073	7.055.815
1978	81.135	7.894.806
1979	79.422	7.952.979
1980	73.318	7.392.779
1981	74.342	7.930.977
1982	79.207	8.599.125
1983	81.399	8.737.827
1984	81.711	9.347.284
1985	75.248	8.804.152
1986	80.690	9.932.851
1987	89.529	11.342.842
1988	96.840	11.719.014
1989	97.209	11.536.174
1990	95.553	11.334.228
1991	98.098	11.773.158
1992	97.778	11.867.370
1993	96.575	12.436.599

DIFERENCIA DE TRAFICO SOBRE 1993

+569.229Pasajeros	+4.80%
- 1.203Aviones	-1.23%

出典：El Turismo a les Illes Balears, 1993, Govern Balear Coneselleria de Turisme

題が存在せぬ(少なくとも顕在せぬ)点にあると思われる。スペイン19の自治州中格段に裕福なマジョルカ経済は圧倒的に観光に依存している(GDPの90%)。パルマ空港公社(Aeropuerto de Palma de Mallorca)としては地域住民対策から解放されて、予算の獲得とデザインに腐心すれば好く、現場を一瞥するに用地などは空港の周囲にいくらでも拡ろがっていて、その拡がり畑、草原、アーモンド樹林であり、海側に密集する建物群はホテルである。恐らくホテルは文句を云わず、宿泊客は「住民」ではない。

大拡張の目的

パルマ空港拡張計画の目的について、バレアレス州観光当局の思想を一問一答の型で示せば次の通りである。(解答者、INSTITUTO BALEAR DE PROMOCION TURISMO, 通稱IBATURのCONSELLERIA DE TURISME, GOVERN BALEAR, すなわちバレアレス州観光省観光局長JUAN CARLOS ALIAK氏)。

問。「私のバレアレス諸島周辺巡航の知見に依れば、当地の海辺の観光開発は限界に達していると思われる。新空港の開設に依りこれ以上来島客が増した場合、本島には来島客の収容力、対応能力があるのか。来島観光客の満足度と自然・環境への^{プレッシャー}圧力並びに破壊、水資源、エネルギー源等について問題は無いのか」

答。「強調したい点がある。本島は空港の大拡張によって来島客の増加を期待していない。来島者数はむしろ抑えたい。一人の観光客すなわち一人の宿泊客について60平方メートルの“緑”を必要とする。建物の敷地、景観、

水資源等を勘案しての数字である。本島はすでにその限界に達している。故に本島は来島客の増加を望まない」

問。「では何故空港を拡張するのか」

答。「本島が望んでいるのは来島者の質^{クオリティ}の向上であって量^{カンティティ}ではない。この方針はすでに確定し、すべての観光政策はこの線に沿って行われている。(注)

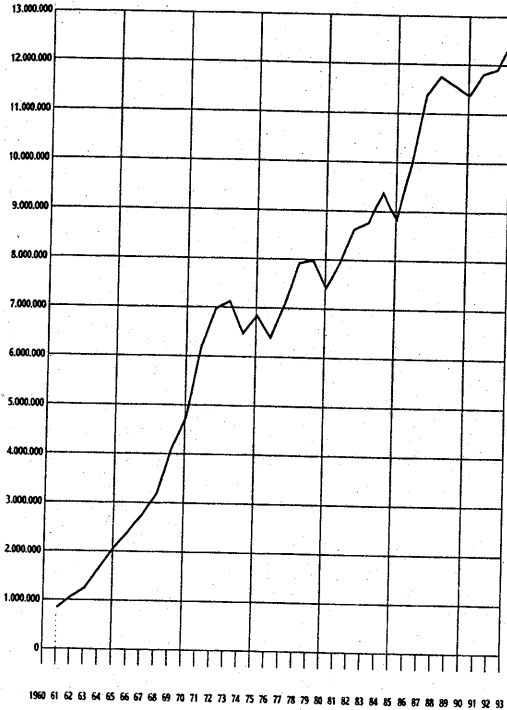


図7 パルマ空港旅客数の推移, 1961—1993
出典: (表2に同じ)

(注) バレアレス群島の観光政策 (抄) Fixing its sights firmly on the tourism of the XXI st. century, the Balearic Islands are well aware that any gains in competitive tourism will be won on the grounds of the quality of the services. This has resulted in what is being called the second tourism revolution, which some European specialists have christened the "Balearic Revolution of Complete Quality".
(TOURIST POLICY OF THE BALERIC ISLANDS TOURIST COUNCIL)

尚且本島としては地中海周辺の他の観光地域との価格競争に勝目は無いと考えている」

問。「他の地域とは?」

答。「イタリア, ギリシア, 中東, 北アフリカである。カリブ海域, 極東も欧州の客を吸収せんとしている。スペインは之等の地域と価格では争えないと判断した。価格のみならず, 遠隔地のエキゾチズムとも争えない。バレアレスはあまりにも長くヨーロッパ人に親しまれ過ぎた。故にこの方針案 (前段の注「政策」参照) に示す如く, 量の争いを質の争いに転換することにした。具体的には零細観光開発を全面規制した。今後行なわれる開発は, 十分に緑を残した広域開発であり質的に高いものに限られる。当地は長く大衆観光地として喧伝され過ぎた。今後はむしろ来島客は押え, 数は少くとも単価の高い客を招きたい。空港の新装もその方針の一環である。」
工期について

1996年の完成の可能性については諸説ある。

その1) 空港ロビーにある新空港PR室には立派な完成模型 (複数), 図面, 起工式, 関係者写真を含む各種参考写真等が展示され, 女性の担当者は筆者の質問に対して, 「もちろん完成します」と答えたのに反し, たまたま傍にいた若い女性は「さあ, どうだか」と反論。

その2) 前記観光局主任カルロス氏は「^{アイホープ}そう望みます」と微笑。

その3) マジョルカに永住し現地事情に詳しいイギリス人の一人は「絶対に無理」と断言。

悪貨は良貨を駆逐しないか。

ホテル業界には,

「高級イメージのホテルの大衆路線への展開は成功するが, 逆は失敗する」

というジンクスがある。ジンクスと云わんよりは公理に近い。ホテル・オークラがレストランを展開すれば, 人々は恐らく高級なレストランと思い, 安ければ感激する。ビジネ

ホテルで成功し有名になったホテルチェーンが高級ホテルを作っても、人々はいつまでも昔のイメージでそのホテルを見る、という簡単な真理である。

バレアレス州がすでに策定、実行に移している前節の方針はすなわち「大衆路線なら高級路線へ」は、観光開発の本源的な問題提起を含んでいる。「悪貨は良貨を駆逐する」（悪いイメージは良いイメージを駆逐する）というホテル展開の公理に正面から挑戦する行為だからである。

ひとたび大衆観光地としてのイメージが定着したマジョルカがそのイメージから脱却、高級リゾートを目ざすのは明らかにこの公理に逆らい、水を高きに導く不毛の努力となる危険を秘めている。前記のイギリス人は「マジョルカ政府は20年前から同じ方針を唱えているが目立つ変化は無い。恐らく20年経っても無理だろう」と極めて悲観的な見解を示した。

第4節 農業と自然景観

自然保護と自然景観保護とは同一ではない。

1) 自然保護とは文字通り自然を保護・維持することであって、恐らく最善の策は人間が居なくなることである。ガラパゴス島、南極大陸で行なわれている如く、極力来島者数とその行動を制限して現状のまゝの状態を后世に残し、それを永遠に継続しようとする考え方である。ダーウィンの進化論の発想と資料の源となったガラパゴス群島の場合、生態系の維持は観光に優先すると思われる。之に反し、

2) 自然景観維持とは観光資源としての自然状態、その美しさ、珍しさを維持し続けようとするものであり、例えば南太平洋のボラボラ島に見られる如く、島民の民度の向上、つれて生活の近代化、バイクの普及等に依って海浜の砂浜や水質の汚染が目立つ中で、ホテル・ボラボラ、クラブ・メドの海辺が旧来

の砂浜と水の美しさ、椰子林の美しさを維持し、時に増進している類の現象を指す。現住民が自然を破壊し、観光産業が自然を維持するケースは少しも珍らしくない。

マジョルカの自然景観について

マジョルカ島の自然景観は次の要素で構成されている。

- 1) 浜^{プラヤ}
- 2) 入江^{カラ}
- 3) 山脈、断崖^{シエラ}
- 4) オリボ (オリブ)
- 5) アルメンドウラ^{アーモンド} (巴旦杏、扁桃)
- 6) 羊
- 7) 限りなく美しい空、水、太陽。
- 8) 若い男女の肉体の美しさ。

その他に、人工景観として風車^{モリ}、村落、古寺僧院、大聖堂、城跡……がある。

1) 砂浜、2) 入江は前述の通り殆んど開発し盡くされ、好くも悪くも現状安定又は除々の改良しか方途は無い。

3) 山岳、断崖 (写真1参照) は幸いにして観光開発するには急峻に過ぎたため、昔のまゝの美しさを維持し、現在は自然保護地域として略完全管理されている。カブレラを含む若干の小離島群も之に準ずる。

6) 7) 8) の美しさについては——神に感謝す——何も問題は無い。残る問題は4) 5) オリボとアーモンド (つれて羊) である。花のカーペット——アーモンド

津田正夫氏は「私のスペイン案内」(主婦之友社刊1977年)の「マジョルカ島」の項で「私はヴァレンシアからの飛行機の上でスチュアデスから、冬おいでになるとマヨルカの島がアーモンドの花で真白になっていて、機が降りるとき雲の中に突込むようですという話を聞いた。」(同書206ページ)

と書いている。

すなわち、アーモンドはマジョルカにとつて農作物と云わんよりは観光資源であることは、本島の収入に占める両者の比重 (観光収

入が収入の90%)を見れば明らかである。日本又はバリ島の水田に見られる如く一般に農業は当該地域の景観を型成する。一般に「自然保護」の「自然」には2種類あり、その1は「原始自然」であり、その2は「人工自然」であり、バリ島の水田、椰子林(原生していない)、日本の水田は明らかに后者に属する。

古来農業、漁業は辛い屋外(そして屋内)労働であり、週40時間労働制やバカンス制度になじまない。すでに地中海の沿岸漁業は資源・労働力の両面から衰退し、漁業者は観光業に転業し(例、イタリア領サルジニア、ステインティーノ)、かつての漁村の景観は失われるか、或いは観光客の観賞来遊を目当てに人為的に維持されている(例、マジョルカ島南東岸カラ・フィギュエラ)。もしマジョルカ島の農民又はその後継者がアーモンドの育成、採取の労働を放棄し観光業労働者となるならば、前記の“花のカーペット”は消滅する。

不滅の樹

オリボについても同じことが云える。オリボはマジョルカ島の魂の木であり、樹齢は時に千年に達し、^{アラブルインフイニテール}“不滅の木”と畏敬をこめて呼ばれる。

もし人々が“不滅の木”の育成を諦めるならばマジョルカ島の観光は不^{インフイニテール}滅でいられるか。

私の質問に対してカルロス氏は意外な——驚くべく卒直な、と云うべきか——答をした。

「当分彼ら(農民)はアーモンド及至オリボの育成を続けるであろう。だが25年先のことは判らない」。

そして敷衍した。

「農民が彼らの農地を手離して農業から手を引くことをバレアレス政府としては止める事は出来ない。まあ彼らは当分続けてゆくだろうと期待されるが25年先のことは判らない」

「農業に対する助成金というような制策は？」

氏は言葉を濁した。実行も難しく効果もあり期待出来ぬ、という印象であった。

農業漁業は深く景観と結びつき、景観は深く観光と結びつく。にも拘らず、好むと好まざるとに拘らず農業者は、能率化、効率化、並びに労働人口の減少の過程で自らの育て維持して来た景観を変えてゆく。アーモンド、オリボ農園の盛衰は、農業問題、労働問題であると共にすぐれて観光問題である。すでに欧州連合(EU)のCAP(域内共通農業政策)に於ても零細農家の自然景観への寄与に着目し、大農法(農地規模の巨大化、農業の機械化)に重大な疑議を呈している。人口爆発と飢餓に直面し切に農産物の増産を計画している低開発国、或は発展途上国の多くが一方に於て観光開発に活路を求めるのは悲劇的な矛盾となる可能性がある。マジョルカ島のオリボとアーモンドはこの矛盾の一つの象徴と思われる。